

「キリマンジャロの雪」における女性像

日　下　洋　右

The Image of a Woman in “The Snows of Kilimanjaro”

Yosuke KUSAKA

ヘミングウェイの描く夫婦も、例えば「ある事の終わり」(“The End of Something”) (1925) の恋人同士や「医師とその妻」(“The Doctor and the Doctor’s Wife”) (1924) の父母や「兵士の故郷」(“Soldier’s Home”) (1925) の母子の関係の延長線上にあり、不仲や破局といった異常な関係に支配されている。「雨の中の猫」(“The Cat in the Rain”) (1925) では夫婦生活に対する倦怠感や欲求不満が出始め、「季節はずれ」(“Out of Season”) (1923) では倦怠感が進行して不和の兆候が現われ、「白い象のような山々」(“Hills Like White Elephants”) (1927) では破局の予兆が見られ、「贈り物のカナリア」(“A Canary for One”) (1927), 「変貌」(“The Sea Change”) (1931), 「エリオット夫妻」(“Mr and Mrs Elliot”) (1924), 「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(“The Short Happy Life of Francis Macomber”) (1936) では破局が決定的となる。「変貌」と「エリオット夫妻」では、破局を迎える男女を描いた他の作品と異なって、破局への過程は屈折しグロテスクな傾向を帯びている。「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」では訣別は時間の問題となるが、それを迎える前に突然過激な手段によって悲劇的な決着がつけられる。「キリマンジャロの雪」(“The Snows of Kilimanjaro”) では、作家を破滅させ、才能を破壊する元凶となった女性と作家との対立は、作家の突然の死によって悲劇的な結末で終る。

本論では、夫婦の愛憎模様を描いた短篇のうち「キリマンジャロの雪」をとりあげ、金と女性の虜となった主人公が金持ちの女性との従属関係を清算しようとするところから、二人の間に生じた相克に焦点を当てて、二人の愛の実体と女主人公の女性像を明らかにする。同時に、この短篇の背景と手掛かりを提供している『アフリカの緑の丘』(*Green Hills of Africa*) (1935) との関連や、この短篇には作者自身の個人的な体験がかなり多く散りばめられていることから、それらとの関係をも明らかにする。

「キリマンジャロの雪」(1936) は、その姉妹編ともいえるべき短篇小説「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」及び長篇の狩猟旅行紀『アフリカの緑の丘』と共に、ヘミングウェイが行なった第一回のアフリカ狩猟旅行の体験とそれから得た知識の所産である。「キリマンジャロの雪」は、当初「芽生える友情」(“A Budding Friendship”) という仮の題名の下で執筆されたが、手を加えられないまま机の引き出しの中に数か月間放置されていたものである。その後、1936年の『エスクワイア』(*Esquire*) 誌の8月号に現在の「キリマンジャロの雪」という題名で掲載されたのである。執筆当初は主人公の名前もヘンリー・デイヴィッド・ソーロー (Henry David Thoreau) と彼の代表作『ウォールデン——森の生活』(*Walden ; or, Life in the Woods*) を暗示させるヘンリー・ウォールデン (Henry Walden) とされていたが、「キリマンジャロの雪」と改題された段階では、ハリー (Harry) という簡単な名前に改められたのである。

ヘミングウェイが最初この作品の主要人物をヘンリー・ウォールデンとしてソローに執心していたのは、『アフリカの緑の丘』の文学談義の中でも吐露されているが、同時代の文人たちと違って自然の中で素朴な生活を実践し、自然の探索を好んだソローの生き方が子供時代から大自然の残っている辺境地に引きつけられ、冒険を好んだヘミングウェイの生き方と一脈通ずるところがあったためであろう。事実、『アフリカの緑の丘』の第一部「追跡と会話」の第一章で展開されている作家論の中で、対話の相手カンディスキー(Kandisky)からアメリカ最大の作家は誰かと問われた作者は、歴代のアメリカ作家をとりあげて辛口の批評を試みているが、その中でソローにも言及し、称賛している。作者はエドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)(1809—49)とハーマン・メルヴィル(Herman Melville)(1819—91)の長所と短所をひとしきり批評した後、アメリカ初期の古典作家ラルフ・ウォルド・エマソン(Ralph Waldo Emerson)(1803—82)、ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)(1804—64)、ジョン・ホイットィア(John Whittier)(1807—92)を槍玉にあげ、皮肉たっぷりにこきおろしている。

一方、作者はこれらの古典派の文人たちと同じ時代に活躍したソローについては、“There is one at that time that is supposed to be really good, Thoreau.”¹と称えて、自然派の作家であるが故に、彼らとは生き方を異にするソローを別扱いにしている。ヘミングウェイがソローに共感するのは、ソローの生き方に彼の生き方とも共通する反文化の姿勢をみているからである。ヘミングウェイは絶えず辺境を求め続けた作家であるといつてよい。子供時代と第一次大戦から帰還後の一時期に毎夏過ごした場所は、「インディアン部落」(“Indian Camp”)(1924)や「医師とその妻」の中でも垣間みられるように、インディアンたちが居住し、彼らとの交流が行われ、まだ原始林が残っていて辺境の面影をとどめていたミシガン州の北端であった。1920年代に作家の修業時代を送ったパリを別にすれば、ヘミングウェイが1928年に初めて居を構えたのは、アメリカ最南端のフロリダ州キー・ウエストであり、その後1941年から18年間の長期にわたって過ごすことになったのはキューバのハバナ近郊であり、晩年に療養を兼ねて転地した先は、アメリカの北西部に当たるアイダホ州の僻地ケチャムである。二度にわたるアフリカへの狩猟旅行も、このように文明の中心地から隔離しようとするヘミングウェイの生き方の延長線上にあるとみてよい。また、闘牛体験、魚釣り、狩猟なども辺境地の探求の一部とみなされよう。このように、ヘミングウェイが文明を拒否して辺境地へ向かおうとする傾向は、大自然の野生味を体験して強烈な印象を受けた子供時代への回帰でもあったのである。この傾向は、ソローの簡索性(simplicity)と野生(wilderness)を重要視する反文化の生活態度や、ニュー・イングランドの範囲内に限られはするが、自然のままの森や山や河への探索を実践してフロンティア・スピリッツへの回帰を示したソローの生き方と相通ずるところがあったとみなして差し支えない。

ヘミングウェイによれば、「キリマンジャロの雪」の構想は1934年4月にニュー・ヨークでヘミングウェイをお茶に招き、予定していた二度目の狩猟旅行の資金を出資したいと申し出たある金持ちの婦人との出会いから生まれたものであるといわれる。²ヘミングウェイがイル・ド・フランス号でニュー・ヨークへ着いた時、船報通信員一同に対して、今後はキー・ウエストに引きこもって執筆に専念し、再度アフリカへ狩猟旅行に出かける費用を稼ぐ予定であると語ったことが報道されて、世間の注目を集めることになった。この報道記事が一人の高名で裕福な婦人の目にとまり、ヘミングウェイはこの婦人からお茶の招待を受けることになったのである。招待に応じて出かけてみると、彼女の招待の目的は、彼がもう一度サファリに出かける予定なら狩猟旅行に必要なだけの資金をいつでも用意するので、資金ができるまで待つ必要がないことを伝え、自らもポーリンと同道しようと申し出るためであることがわかった。しかし、ヘミングウェイはこの女性の申し出をよく考えた上で丁重に断ったというのである。

このエピソードが事実とすれば、「キリマンジャロの雪」に登場する金持ちの女主人公ヘレン (Helen) は、一見するとこの女富豪がモデルかヒントになっていた可能性がありそうだが、カーロス・ペイカーはヘレンをヘミングウェイの二度目の妻ポーリンと結びつけている。ペイカーによれば、この短篇の中では裕福なポーリンのことが間接的に非難されているという。³ アーカンソー州ピゴット出身のポーリン・プファイファー (Pauline Pfeiffer) は、地元の綿花加工会社社長兼大地主である富豪の娘である。彼女が裕福な生活をしていた点は、パリ時代のヘミングウェイ夫妻と知り合った頃『ヴォーグ』(Vogue) 誌のパリ版のファッション担当記者をしていたという職業柄とはいえ、最新の高級ファッションに身を抱んだ垢ぬけした身だしなみが、その頃裕福ではなかったハドリー (Hadley) の着古した地味な服装と著しく対照的であったことに端的に表われている。ポーリンとの関係の一端は、「贈り物のカナリア」の結末に暗示されているが、⁴ ポーリンは当時まだ修業時代であったヘミングウェイの家庭にまで出入りして、ハドリーから奪い取るような形で彼を手に入れてしまう。また、この作品の執筆当時はヘミングウェイとポーリンとの関係が徐々に悪化していて、彼が彼女から離反しつつあった事情が公然と匂わされているといわれる。⁵ ヘミングウェイは1940年11月にポーリンと正式に離婚し、直ちにマーサ・ゲルホーン (Martha Gellhorn) と結婚していることから考えれば、この頃二人の間に不和の兆候がみられたとしても不思議はない。こうしてみると、ヘレンとポーリンとの関係も、ハリーとヘミングウェイとの関係や過去の出来事の回想とヘミングウェイの体験との関係などと共に、伝記的にみて興味深いエピソードといえよう。

「キリマンジャロの雪」も、「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」と同様に、ヘミングウェイの個人的な体験を軸にした物語ではなく、創作された物語であることを証明するのは容易である。ヘミングウェイは1933年から34年にかけてアフリカへ狩猟旅行に出かけた時、アメーバ赤痢にかかって治療を受けたことはあったが、壊疽にかかったことはなく、まして死んだりもしなかったし、ライオン狩りや水牛狩りをしたが、ライオンに追いかけて逃亡したことも、妻に殺害されもしなかった。さらに、ハリーは一個人としても作家としても失敗者とされ、マコーマーは臆病者とされて、ヘミングウェイ・ヒーローの弱点や欠点が誇張され、歪められているという点では、両短篇とも作られた物語とみなしてよい。しかし、「キリマンジャロの雪」では、回想シーンを中心に考察されるならば、個人的な体験が大きなウェイトを占めていることに気づかれよう。

例えば、三度目の回想場面では、1922年から23年にかけて、ヘミングウェイとハドリー夫妻の住んでいたアパートのあったパリのコントルスカルブ広場周辺の風景と、その界隈に居住していた貧しい住民たちの生態が追想されている。カルディナル・ルモワンヌ街を登りつめた丘の上に位置するこの広場には、ポール・ヴェルレーヌ (Poul Verlaine) が息を引き取ったという曰くつきの高層ホテルがたっている。二人の住んでいたアパートは二部屋しかなかったので、ハリーはこのホテルの最上階の一室を1か月60フランで借り、その部屋で彼は自分が将来書こうと思っていた作品の第一歩となるものを書いていたことを想起す。この回想シーンは、パリの修業時代のヘミングウェイ個人の体験と明らかに重なり合うこと、またハリーによって構想されている作品こそ、作家を志したヘミングウェイの記念碑ともなるべき最初の短篇集『われらの時代に』(In Our Time)

(1925) を示唆していることなどから、「キリマンジャロの雪」の中で壊疽にかかって死にかけているハリーと作者ヘミングウェイとを結びつけることは容易であろう。三度目の回想では、パリ時代の追憶の他に、子供時代にヘミングウェイ家の別荘ウィンディミア荘に滞在中、ヘミングウェイが半マイル離れていたベーコン農場から牛乳を運んできてその空嚢を戻す牛乳運搬を日課としていた頃の、ワルーン湖畔の丘の頂きにたっていたベーコン爺さんの丸太小屋にまつわる思い出や、夏に黒い森へ初めて鱒釣りの旅に出かけた思い出も追想されている。

一度目の回想シーンでは、1925年の冬にヘミングウェイ夫妻がオーストリアのシュルンスに滞在

中、クレスパーシュピッツ山の山腹にあるマドレーネルの小屋の上の雪渓を大滑降したことや、その小屋でスキー教師のヴァルター・レント (Walther Lent) 氏たちとトランプゲームを行なって楽しんだ時の思い出などがそのまま描写されている。二度目のシーンでは、女を漁り歩いたり、女を奪い合って喧嘩したりして、ロマンティックな冒険談に変形されているが、コンスタンティノーブルへの旅が追想されている。四度目のシーンでは、1930年と32年の二度にわたって訪れたことがある、ワイオミングのパイロットとインデックスの峰々の雄姿が夕日を背に受けて黒々と聳えてみえるノードクィスト牧場で乗馬したり、釣りをしたりした思い出や、牧場を貫流する灌漑水路の澄み切った水の静かに流れる音と、台地に美しく映えるヨモギの茂みなどの印象深い場面が回想されている。

この短篇では、回想シーン以外にも伝記的な特徴が著しいことを裏づける場面がいくつか認められる。例えば、He remembered poor Julian and his romantic awe of them and how he had started story once that began, “The very rich are different from you and me.” And how some one had said to Julian, Yes, they have more money. (p.72) という場面がある。金持ちに対してロマンティックな畏敬の念を抱き、金持ち階級を過剰に意識した書き出しの短篇を書いた哀れなジュリアン (Julian) とは、言うまでもなくフランシス・スコット・フィッツジェラルド (Francis Scott Fitzgerald) (1896—1940) のことであり、彼の書いた短篇とは「金持ちの少年」 (“The Rich Boy”) であり、⁶ それを茶化した人物とは、他ならぬヘミングウェイ自身のことである。

この場面に関して、それ以上にヘミングウェイ個人の思い出が素材として用いられていることを裏づける点は、大金持ちも想像していたほど魅力的でないと悟って破綻したジュリアンという人物が、雑誌に掲載された版ではスコット・フィッツジェラルドとされていたことである。フィッツジェラルドは自分の名前がこの短篇の中で使用されているのをみて激怒し、ノース・カロライナの旅先から抗議の書簡をヘミングウェイに書き送ったのである。

Dear Ernest: Please lay off me in print. If I choose to write de profundis sometimes it doesn't mean I want friends praying aloud over my corpse. No doubt you meant it kindly, but it cost me a night's sleep. And when you incorporate it [the story] in a book would you mind cutting my name? It's a fine story—one of your best—even though 'Poor Scott Fitzgerald, etc.' rather spoiled it for me. Ever your friend,

Scott

[P.S.] Riches have never fascinated me, unless combined with the greatest charm or distinction.⁷

この抗議を受けて、ヘミングウェイはスコット・フィッツジェラルドをジュリアンに変更したのである。このように、この短篇には過去の個人的体験から生まれたエピソードが至るところに散りばめられているが、サファリの体験と直接あるいは間接に関わる逸話も、当然のことながら作品の一部を占めている。

旧友のコンプトン (Compton) の操縦する小型飛行機が死に瀕しているハリーの救助に飛来して、彼をナイロビの病院へ移送してくれるだろうと彼が想像する最後のクライマックスの場面では、ヘミングウェイが赤痢の治療を受けるために、タンザニアの狩猟地から小型の複葉機で発った時のことが明らかに回想されている。1934年1月、狩猟を開始してから間もなくのこと、ヘミングウェイにアメーバ赤痢の兆候が現われ、1月中頃には症状が最悪の状態となった。ヘミングウェイ一行の狩猟案内人フィリップ・パーシヴァル (Philip Percival) は、ヘミングウェイをナイロビへ送って

赤痢の手当てを受けさせようと救助の飛行機を手配した。虚構の場合と同様に、救援機は二人乗りの複葉機であり、キャンプ地の近くの地面は飛行機の離着陸に備えて平らにならされた。機映が見えると、着陸地点を示し、飛行機を誘導するために、短篇の中で少年たちが走り出して行って火を焚きつけ、その上に草を積み重ねたように、キャンプの使用人たちが滑走路の両側で焚火をした。ハリーを乗せた飛行機も、ヘミングウェイを乗せた飛行機も、ナイロビへ向かう途中アルーシャに立ち寄る必要性が生じるかもしれないので急ぎょ出発する。というのも、ナイロビまでは空路200マイル以上あるため、途中のアルーシャで飛行機に燃料を補給しなければならない事態が生じるかもしれないからである。ただ、史実上では救援機はアルーシャに立ち寄ってからナイロビへ向かうが、虚構上では燃料の足りる見きわめがついたため、アルーシャへ向かわずに左へ折れて一路ナイロビへ向かうので、この点は事実と虚構とはやや異なっている。

... ahead, all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. (p.76) と描写されているように、幻想の中でハリーはナイロビへ向かう途中、飛行機から東側の前方に雪を頂いて純白に輝くキリマンジャロの雄大な姿を見ながら永遠の世界へ昇華される。ヘミングウェイも赤痢の治療を受けるためナイロビへ向けて飛行中、機上からはるか東方に雲に包まれ、雪を頂いたキリマンジャロの雄姿を目のあたりに見ている。作品の冒頭に掲げられているエピグラフでは、*Kilimanjaro is a snow covered mountain 19,710 feet high, and is said to be the highest mountain in Africa. . . . Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard.* (p.52) と述べられている。バイカーによれば、キリマンジャロの西側の山頂付近に横たわっている干からびて凍りついた豹の死骸のことは、ヘミングウェイが狩猟ガイドのパーシヴァルから聞いた話を基にしたものであるといわれる。パーシヴァルの話によれば、リチャード・ロイシュ (Richard Reusch) という登山家が1926年の秋に、キリマンジャロのキボー峰の外輪山の火口の縁で、からからに乾いて凍りついた豹の屍を発見したという。ヘミングウェイはエピグラフを *No one has explained what the leopard was seeking at that altitude.* (p.52) と意味深長に締めくくっているが、豹は山羊を追いかけていたというのが真相であるといわれる。⁸

「フランシス・マコーマリーの短い幸福な生涯」と「キリマンジャロの雪」の背景となる知識を提供している『アフリカの緑の丘』の中で、作者は狩猟旅行紀の他に独自の文学論を展開している。その中で最も興味を引く話題の一つは、“How far prose can be carried if any one is serious enough and has luck. There is a fourth and fifth dimension that can be gotten.”⁹ と、散文の可能性に言及されている点である。四次元あるいは五次元の散文が実現されるために作家に要求される資質は、キップリング (Kipling) (1865—1936) のような才能、フローベール (Flaubert) (1821—80) のような修練、絶対不変の良心、それに知性と公正である。特に散文の可能性を実現するための最も困難な点は、時間があまりに短いので、生き抜いて仕事をやりとげることである、とヘミングウェイは力説している。散文の可能性の追求がいかに困難なものかを身をもって実証した典型的な人物こそ、志をとげぬまま人生の半ばで死地に赴く作家ハリーである。

忍びよる死を意識しながらハリーが罪悪感に苛まれるのは、金と酒と女に溺れ、高慢、偏見、怠惰、そして俗物根性にどっぷり漬って修業を怠り、才能を破壊した愚かさ、作家としての信念を裏切ったことに対する深い悔恨の情である。彼は自己の犯した愚行と無為に浪費した過去の人生に対する悔悟の念から、人生をもう一度やり直し、作家としての修業の生活に再び戻ろうと決意して、思い出の地アフリカへやってきたのである。アフリカは人生の最盛期に最も幸福に過ごした場所だったので、人生の再出発のきっかけをつかむには最もふさわしい土地だったからである。しかし、彼の再出発の悲願も、壊疽による死によって志半ばにして挫折してしまうのである。次第にもうろ

うとしてくる意識の中で、次々と回想されるまだ作品化されずに取っておかれた素材も、日の目をみる機会が与えられぬまま、ハリーの死と共に永遠に葬り去られてしまう。『アフリカの緑の丘』の文学論の中で、ヘミングウェイが熱っぽく語った文学の極致ともいえるべき四次元あるいは五次元の散文の可能性を、このような素材を利用して試めすこともなく、ハリーは死を迎えなければならない。

この作品のエピグラフ *Kilimanjaro is a snow covered mountain 19,710 feet high, and is said to be the highest mountain in Africa. Its western summit is called the Masai "Ngāje Ngāi," the House of God. . . .* (p.52) のキリマンジャロの別名「神の館」は、文学の極致の象徴として用いられている。それ故、続くエピグラフ「この西側の頂上近くに、干からびて凍りついた一頭の豹の死体が横たわっている。」の中にみえる「神の館」に到達して、屍となりながらも朽ち果てることなく永遠にそこに横たわっている豹は、文学の理想の極致に達する夢が実現されずに、徐々に体が腐敗して命を終えようとしているハリーと対照されているのである。ハリーが豹の辿りついた「神の館」と呼ばれるキリマンジャロの頂上に到達するのは幻想の中である。というのも、ハリーが幻覚の中で救援機に乗りこんでナイロビへ向かう途中、機上から雪をいただいたキリマンジャロの高峰を望み、自分が行こうとしているのは、陽光を浴びて純白に輝くあのキリマンジャロだと悟るからである。

『アフリカの緑の丘』で展開されている文学論の中で、第二の興味深い点は、作家を破滅させたり、作家の才能を阻害したりする要因に触れていることである。『アフリカの緑の丘』との関連からいえば、「キリマンジャロの雪」は散文の可能性を探求した作品というよりも、むしろこの作家を破滅させる要因を分析した作品とみるべきである。作家の破滅の原因の一つとして、作家の信念の欠如が挙げられている。信念の喪失は、作家が批評家に耳を傾け過ぎることから生じる。例えば、ある作家がある批評家から大家だと称賛されて、その批評家の評価を真に受けるとすると、けなされた場合にもその批評家を信用してしまうため、その作家は自信を失ってしまうからであるといつて、作家は作家個人の自律心と信念の欠如の怖さを指摘している。

それ以上に深刻な要因は、経済的な問題である。作家は作品を書くことによって金を儲けると、金儲けの虜になって乱作し、駄作を書き散らす結果になる、と作者は警告している。“They make money. It is only by hazard that a writer makes money although good books always make money eventually. Then our writers when they have made some money increase their standard of living and they are caught. They have to write to keep up their establishments, their wives, and so on, and they write slop.”¹⁰ このように、作家は才能を研ぐことよりも金儲けに走る傾向があり、作者はこの怖さを戒めているのである。「キリマンジャロの雪」では、経済的な問題は金持ち連中、特に金持ちの女性と結びつけられた形でとりあげられ、作家を破滅させる元凶として強調されている。というのも、主人公の作家は安逸な生活を手に入れるために、裕福な未亡人のお抱え者となって、自己の人生と才能を台なしにしてしまうからである。

『アフリカの緑の丘』の文学談義では、批評と金の有害性の他に、理由は示されていないが作家を墮落させる要因として、政治、女、酒、野心が挙げられている。そうした点を考え合わせると、「キリマンジャロの雪」では、金と酒と女が作家の活動や才能を阻害する元凶として特筆されているとみるべきである。壊疽に酒が悪いことから、妻がハリーの飲酒を禁じているにもかかわらず、彼はウイスキーソーダを再三要求するため、酒を飲む、飲ませないという問題で二人が何度も口論するシーンは、ハリーの飲酒癖を象徴した出来事といえよう。ハリーが痛飲するようになったのは、He had had his life and it was over and then he went on living it again with different people and more money, with the best of the same places, and some new ones. (p.59) ことから明らかなよ

うに、金持ち連中と交際してこれまでとは質の違った生活を始めるようになってからのことである。ハリーは *The rich were dull and they drank too much, or they played too much backgammon. They were dull and they were repetitious.* (p.72) と非難し、軽蔑しているにもかかわらず、金持ち連中とヨーロッパからアフリカまであちこち駆けまわった挙句、知覚を鈍らせてしまうほど自らも酒浸りになって、彼らを批判する資格がない人間となってしまう。

作家ハリーは金持ちたちとつき合うようになってから、．．． *you made an attitude that you cared nothing for the work you used to do, now that you could no longer do it.* (p.59) ように、すぐれた作品を世に出すこともなく、無為のうちに幾年も過ごしてきたのである。彼は金持ち連中と遊び回り、酒と女にうつつをぬかして安逸な生活を食いつづけ、ものを書く才能をないがしろにしている間に、それを錆つかせてしまうことになったのである。彼は自己の才能を鈍らせた責任を *this rich bitch, this kindly caretaker and destroyer of his talent* (p.60) と呼んで、金持ち階級の一人であり、彼に何不自由のない安楽な生活を提供したヘレンに帰させようとする。しかし、同時に自堕落な生活を送った結果、才能を潰したのは自分自身なのだと言って、彼は己の非をも責めるのである。Nonsense. *He had destroyed his talent himself. . . . He had destroyed his talent . . . by laziness, by sloth, and by snobbery, by pride and by prejudice, by hook and by crook. . . . It was a talent all right but instead of using it, he had traded on it.* (p.60) このアンビヴァレントな心境は、明らかに彼が過去数年間にわたる放蕩生活を省察して、自責の念に駆られてもいるからに他ならない。

この短篇を伝記的な観点から解釈するフィリップ・ヤングは、堕落した生活に対するハリーの責任転嫁から自責へと揺れ動く姿勢に、一流の小説『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*) (1929) を世に出してから「キリマンジャロの雪」が書かれる1936年までに7年という歳月が流れ去ったが、その間にこの名作に匹敵するすぐれた作品を生みだしていないことに対するヘミングウェイの反省の弁が読みとれると主張している。¹¹ 「キリマンジャロの雪」の中で、ヘミングウェイは7年間というものの不本意ながら才能を使うことなく、怠惰な生活を送って才能を台なしにしてしまった自己を分析し、小説家としての過去の失敗や過ちを省みているというのである。換言すれば、「キリマンジャロの雪」そのものが、作者が過去に犯した罪を浄化する機能を果たしているのである。従って、この作品は金持ちに幻滅して破綻したあの哀れなジュリアンと同じ運命を辿ることなく、永遠に残る純粋な作品を書きあげようとする作者の強い決意と信念を表したものであるともいえよう。

「キリマンジャロの雪」の中で、作家を破壊する元凶として何よりも指弾的とされているものが金持ちの女性である。この問題は、ジュリアンのように破滅の道を辿らないうちに、主人公の作家が金持ちの女性との屈從的な支配関係を断とうとして、彼女を糾弾することから二人の間に生じた摩擦という形で小説化されている。事実、この短篇では作家とこの女富豪との確執に焦点が当てられており、二人の軌轢は回想と綾を織りなし、淡々と進行するプロットの中で唯一劇的で緊張感にあふれた場面をつくりだしている。ハリーは金持ちの未亡人ヘレンとの出会いによって、逸楽的な生活にのめりこんでしまったが、これは金持ち連中との交際によって享樂的な生活に溺れていたことの延長線上にあったとみてよい。

マコーマーの妻マーゴットが積極的に男性を破壊する女性であるとすれば、ヘレンは消極的に男性を支配し、破壊力を潜めた女性といえる。しかし、一見すると彼女は男性に献身的に尽くすタイプの女性にみえる。ハリーが壊疽にかかって死を意識しながら横たわっている間中、懸命に看護と世話をし、マーゴットとは違って彼の悪態に反抗することもなく、涙さえみせる。彼女のこの従順な態度に彼はつい軟化して、*"I love you, really. You know I love you. I've never loved any one else the way I love you."* (p.58) という虚偽がいつも彼の口をついてでる。この虚偽こ

そ、彼がヘレンに支配され、服従していることを認めている証左に他ならない。別言すれば、これは二人の支配関係を容認しているための言わざるをえないお世辞なのである。しかも、この甘言を口に出さざるをえない理由が彼の方には存在する。この虚言によって、彼は己の快適な生活手段と彼女の熟練した肉体を手に入れていたからである。言わば、自己の生活の保障と慰安とを得るため、彼は大金持ちの未亡人のお抱え者になったのである。二人が一緒に生活するようになった経緯を知ると、この間の事情が明らかになる。

She liked what he wrote and she had always envied the life he led . . . The steps by which she had acquired him and the way in which she had finally fallen in love with him were all part of a regular progression in which she had built herself a new life and he had traded away what remained of his old life.

He had traded it for security, for comfort too . . . She would have bought him anything he wanted. He knew that. She was a damned nice woman too. (pp.61—62)

このように、彼は過去の生活と活力を売って安楽な生活と快楽を手に入れていたのである。従って、ハリーがヘレンに向かって、彼女こそ彼の墮落の根源なのだと敵対感情をむきだしにしてみても、所詮空しい反抗にすぎない。結局、He could feel the return of acquiescence in this life of pleasant surrender. (p.64) と、彼は彼女に譲歩し、現状に甘んじざるをえなくなる。

彼は経済的な面はもちろん、快適な生活のあらゆる面を彼女に依存しているので、彼女が支配権を握るのは当然のことなのだが、彼女の方ではその素振りすらみせようとはしない。

“It [money] was always yours as much as mine. I left everything and I went wherever you wanted to go and I’ve done what you wanted to do.” (p.55)

彼女は優位を誇示するどころか、むしろへりくだった態度をとる。彼女は最大の武器の一つである金銭面についても優越感を露わにすることはなく、相手をたてて下手に出ようとする態度すら取るのである。しかし、ハリーからみれば、この態度こそ彼女が支配権を掌握している拠所なのである。「この金持ちの牝犬、この親切な世話やき、彼の才能の破壊者」や、「おれをお抱え者にしたりしなかったら」などと彼が罵倒するのは、彼女の有利な立場を利用しようとせず、むしろ自己を卑下する態度にこそ、実は大変な破壊力が潜められていることを確信しているからに他ならない。彼女は相手の立場に立つおとなしい態度を盾にして、金とベッドという男性を所有し、支配するための最大の武器を振回していたのである。それ故、彼の才能を鈍らせた原因は、彼女の利己的な所有欲にあるのだと敵愾心を露わにしても、結局彼は彼女の温順な態度の前に、いつも去勢された雄牛のようにすすぐごと引き下がらざるをえなくなる。それどころか、彼の才能は己が破壊したのだと自分自身を責めさえることになるのである。従って、一見するとヘレンは自己の優位を誇示して、その立場を利己的に利用するマーゴットとは著しい対照性を示していることから善女とみられがちだが、マーゴットとは異質な形で男性を支配し破壊する悪女として描かれているとみるべきである。

ヘレンの一見優しい献身的な態度は、「兵士の故郷」に登場するクレップズの母親の姿を想起させる。母親が息子を庇護して更生させようと母性愛を発揮すればするほど、彼女は彼の苦しい心境や境遇を無視し、彼の意志と欲求を抑圧することになる。ヘレンも抱擁力という母性愛によって、死期が近いことを察知して自制心を失いがちなハリーを優しく包みこみ、苦痛をいやそうとする。この母性本能こそ、ハリーの意志と欲求を抑圧し、金とベッドとは別の形で彼を支配して臍抜けにす

るみなもとでもある。ヘレンの悪女の本質を認識したハリーは、彼女との服従と支配の関係を断ち切ろうとするところから、二人の間に精神的な摩擦が生まれるのである。それは、マコーマーのように悪態をついて反抗するハリーの態度と、それを優しく受けとめながら支配権を維持しようとするヘレンの態度とがぶつかり合うところに具体的に現われている。しかし、マコーマーが臆病で依存心の強い性格を克服して、妻との腐縁を断ち切り、離別しようとする矢先に命を失うように、ハリーもヘレンの破壊力を潜めた支配から脱して、人生の再出発をはかろうと決意するが、それが成就しないうちに死を迎えなければならない。

こうしてみると、「キリマンジャロの雪」も、男女の愛憎模様と男女の対立や破壊意識から生じた異常な関係とを扱った短篇の世界と同一線上にある作品といえよう。さらにいえば、愛が幸福な結末を決して迎えることのない男女の異常な世界を追求すれば、結局は生き方も趣味も合わず、臆病な父を強気な母が支配するといった、およそ正常とは思われないヘミングウェイの父母の関係に行きつくのである。これは、ヘミングウェイが実生活の世界においても、虚構の世界においても、終生この原点に捉われ続けたことを意味している。

注

本文の（ ）内の引用ページ数は、Ernest Hemingway, *The Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Charles Scribner's Sons, 1953) による。

- 1 Ernest Hemingway, *Green Hills of Africa* (New York: Charles Scribner's Sons, 1935), p.21.
- 2 Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969), p. 289 参照。
- 3 Baker, *A Life Story*, p.355 参照。
- 4 物語は次のような結末で終わっている。We were returning to Paris to set up separate residences. Ernest Hemingway, *Men Without Women*, p.186.
- 5 Baker, *A Life Story*, p.322 参照。
- 6 “The Rich Boy” の冒頭の一部は、Let me tell you about the very rich. They are different from you and me. と書かれているので「キリマンジャロの雪」のこの場面がフィッツジェラルドとその短篇に基づいていることは明らかである。
- 7 Baker, *A Life Story*, p.290.
- 8 Baker, *A Life Story*, p.253, p.289 参照。
- 9 Hemingway, *Green Hills of Africa*, pp.26—27.
- 10 Hemingway, *Green Hills of Africa*, p.23.
- 11 Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (Pennsylvania State U.P., 1966), pp.76—77 参照。

テキスト

Hemingway, Ernest. *The Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Charles Scribner's Sons, 1953.

- _____. *In Our Time*. New York: Charles Scribner's Sons, 1958.
- _____. *Men Without Women*. New York: Charles Scribner's Sons, 1955.
- _____. *Winner Take Nothing*. New York: Charles Scribner's Sons, 1961.
- _____. *Green Hills of Africa*. New York: Charles Scribner's Sons, 1935.

参考文献

- Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: The Writer As Artist*. New Jersey: Princeton U.P., 1963.
 Baker, Carlos. *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.

- Fenton, Charles A. *The Apprenticeship of Ernest Hemingway : The Early Years*. New York : Octagon Books, 1975.
- Sokoloff, Alie Hunt. *Hadley : The First Mrs. Hemingway*. New York : Dodd, Mead & Company, 1973.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway : A Reconsideration*. Pennsylvania State U.P., 1966.